

# 増田四郎篇の開発・制作について

小 畠 通 晴

## I. 企画の狙い

人物ライブラリー「学術の記録」は、学術研究に生涯を送った一人の人物の研究の軌跡を、本人の口から直接語ってもらい、著書や評伝から得られない人間性・情熱・気概といったものもあわせ、記録にとどめようというものである。学術の記録と人間を描くことの両面があり、それがうまくクロスすればよいが、油断すれば二兎を追う企画にもなりかねない。両者のウェイトのおき方は、とりあげる人物によって柔軟性を持たせるのか。そんな議論を重ねつつ、昭和63年度試作版として、東京経済大学理事長で歴史学者・増田四郎氏をトップバッターにお願いすることになった。増田先生は1908年（明治41年）生まれの当時80才、中世ドイツ史の研究では第一人者と目されている学者である。この道一筋の研究者であるとともに、一橋大学の学長をはじめ長年大学経営にもたずさわられ、その識見と滋味あふれる人柄も知られている。当時、放送大学の運営審議会委員であり、又、放送教育開発センター・加藤所長とも親しい。

昭和63年10月、放送教育開発センターの創立10周年式典で、「情報化社会における地域と文化」というテーマで増田先生が1時間の記念講演をされた。顔に刻まれたしわは深かったが、音吐朗々という感じの語り口で、聴衆に感銘を与えた。とくに私にとって印象深かったのは、一つには何十年と学問をしてきても、いまだに分からないことばかりで、次々と疑問が湧いてくると話されたことであり、もう一つは、故郷の村での少年時代の体験や、上京後の恩師との出会いなどが、先生のその後の学問研究の出発点となっているということであった。頭の中で言葉を選び、考えながら話される口調は、決して能弁ではないが、聞く者の心に響く。この企画に、先生は適任と思われた。

## II. 交渉の経緯

増田先生は著名な歴史学者であり、著書も多い。著書の何点かを購入し、どんなことを研究してきたのか、調べることにした。事前に増田先生を知るうえで、とくに役に立ったのは『大学でいかに学ぶか』（1966.講談社）と『ヨーロッパとは何か』（1957.岩波書店）の2冊であった。いずれも新書判で大衆向けの“教養書”だが、それだけに著者の考え方がストレートに読み取れた。とくに『大学でいかに学ぶか』（この本は昭和41年の初版だが何と53版を重ねている）は、自伝的要素があり、かつ学問に取り組む先生の姿勢が明確に表わされている。小さなこともおろそかにせず、実直にそして謙虚に研究を積み重ねてきた人という印象であった。それだけに交渉は必ずしも簡単には進みそうにない感じもあった。

11月中旬のある日の午後、増田先生の自宅に電話をかけた。折から先生は在宅で電話に出て

下された。

「放送教育開発センターで今『人物ライブラリー・学術の記録』というものを企画しています。一人の研究者の学術研究の歩みというか、それを評伝ではなく、ご本人の口で語っていただくというものです。」

「なるほど。その趣旨はいいね。」

「ついては、これは今年度初めて作るので、日頃放送大学のこともよくご存知の先生にまずお引受けいただけるとありがたいのですが。」

「趣旨はたいへん結構だが、私が最初というのはどうも。それにふさわしい人はほかにたくさんいますよ。」

と、先生は私の予感どおり辞退された。

「では先生、一度私どもと会ってくださいませんか。いろいろお知恵もお借りできればありがたいのです。それに電話ではなく、お目にかかってお願いしたいこともありますので。」

ということで12月初旬に自宅を訪ねることが決まった。

12月4日はよく晴れた。初冬にしては暖かい午後、高杉制作部長・古川ディレクターとJR武蔵小金井駅で落ち合い、東京経済大学に近い増田家を訪問した。武蔵野の面影を残す小高い丘の上にある静かな住宅街である。

応接室に通されて、もう一度「記録」の趣旨やねらいを三人で代わる代わる繰り返して説明すると、

「よく分かりました。何とかご希望に添うよう考えてみましょう。」

と、きわめて前向きに応じてくださった。

「ついては、例えば聞き手を置いて、その人に語るのと、先生がお一人で話されるのとどちらがいいですか。」

「収録する場所のご希望はありますか。いつごろがいいでしょうか。」  
気持ちが変わらないうちにとばかり、焦り気味に迫る。

「年をとって寒いのはこたえるのでね。」

この一言が、その後の進行を決めたようだ。

「私どもも、あまり寒い時期よりも、少し春めいてきたころのほうがありがたいのです。3月に入ってからでどうですか。」

「そうしてもらえるといいね。場所は、私が理事長をしていることでもあるし、(東京経済)大学でどうだろう。学長室長に言っておくから、相談してください。」

「ご自宅ではどうですか。書斎などでゆったりと話していただけるととてもいいんですが。」

「いや、私の友人の彫刻家がある賞を受けたとき、テレビ局から撮影に来て、それが10人も20人もやってきて、一日がかりであしろ、こうしろと大変だったらしいよ。奥さんはその後ねこんでしまったといっていましたよ。それにうちの家内はからだが丈夫じゃないので、お構いできないしね。できたらほかの場所がいいね。」

「わかりました。ではそれはあとでご相談ということに。」

「それから聞き手は少し考えてみましょう。」

予想外の上首尾に、三人は軽い興奮を覚えつつ増田家を辞した。

年が明けた。前年の秋から体調を崩していた昭和天皇の容体が、いよいよ悪くなり、ついに正月7日の朝崩御、年号は平成と変わった。

「記録」の準備の方はその後やや停滞気味であった。近いうちに先生に連絡をとるか、会うかしなければと思いつつ、1月6日に構成案をワープロで打って、12日に郵送した。

翌日手紙が届いた。いぶかりつつ開けてみると「先日の話はよく考えてみると私の任ではないように思う。からだもこのところ不調だし、一旦は引受けておきながら、済まないがやはりほかの人にしてほしい。」というようなことが書かかれている。

驚いて制作部長に相談し、もう一度会ってお話したい旨電話をかけたが、先生は、所用で出かけて不在であった。

ところが次の日再び速報がきた。

「先の手紙を投函して戻ってくると、あなたから構成案が届いていた。私のことをここまで考えてくれているのかと思うと、断わりきれない。私でよければやりましょう。」ということである。安心感が湧いてくる。

手紙のやりとりから、はらはらした1週間であった。

1月20日午後、2度目の増田家訪問。

「先生、どうも無理をいって済みません。お引受けいただいてほっとしています。ありがとうございました。」

「本当は私なんかよりも先にやった方がいい人はたくさんいます。しかしここまで君の方で準備していて、私でお役に立つならやりましょう。私もやる以上はと思って、まあこんなことでどうだろう。」

といって一枚のメモを渡された。それは、話のあらすじを達筆で箇条書きにしたもので、トークの要点と記されていた。引受けた以上はという先生の気迫を感じたものである。

### Ⅲ．構成から撮影まで

次の課題はフォーマット（演出形式）をどうするかということである。検討の論点はおおよそ次のようなことだった。

ア 聞き手を置くのかどうか。

イ 増田氏のトークの内容にディレクターがどこまでかかわることが出来るのか。

（専門家の話にどこまで入っていけるか）

ウ 「構成」スタイルか、「ストレート・トーク」か。

エ 場所はどこがよいか。

オ 聞き手を置かない場合、人物紹介をどんな形で行なうか。

カ カメラ、VTRの台数。

先生の語りくちを生かすのは対談よりは、むしろモノログ、ストレート・トークの方がよいのではないかと思われた。それも増田氏の実直で素朴な人間像を生かす場所で、じっくりと語ってもらうのがよいという感じであった。

構成上の困難の一つは、一つのことを60年やってきた人の話を、どのように段落分けし、括っていくかということである。二つ目は一人語りで変化のつきにくい画面に、どうめりはりをつ

けるかということである。三つ目はすべてを語るとすると、相当長い時間になることを覚悟しなければならないが、この「記録」を見る人を長時間画面にひきつけるため、どれだけの演出の工夫ができるかということである。

増田先生の研究領域は非常に幅が広く、しかも研究テーマが変わったように見えても実は底流では連続していて、一ディレクターが話をまとめてから再構成することは不可能と思われたが、先生が話の筋道をつけるヒントにと思って、次のメモを案としてお渡しした。

1. オープニング	キャンパスを歩く増田氏
2. 生い立ち	学生に若い頃のことを語る ふるさとの映像
3. 学問への出発	ここからストレート・トーク 関東大震災の映像 恩師の肖像
4. 増田氏の学問研究	(記録の本筋) 研究に関係のある映像
5. 増田氏の歴史研究	(     "     )
6. 残されたこと	人生で、研究で
7. 学生に与える	再び学生に語る
8. 余暇の楽しみ	数年前から始めた油絵を描く 家族や孫との団欒
9. エンディング	

トーク部分の収録は3月2日、東京経済大学でということに決まった。先生は、それ迄の間、どうやらじっくり話しの原稿を作りあげらしい。聞き手はかえって置かない方がよい。その代りカメラわきに、私がいることとしよう。

2月21日三重県立上野高校を訪ねた。

明治34年に建てられた本館は風格があり、先生が通っていたころの姿をとどめている。図書室には氏が寄贈した著書およそ20冊が、「ふるさと文庫」として、卒業生の横光利一の作品などと一緒に保存されている。

午後奈良県・月ヶ瀬村を訪ねた。観光協会の島田氏の世話になり、車を出してもらって村内各所を見てまわった。天気が悪く、寒かったが、かえって先生が著書にも書いている山村の雰囲気を感じとれた。先生はこの峠を大きい自転車に乗って、上野中学（当時）へ通ったんだなということが、実感として伝わってくる。梅林も見ごろで、冬とはいえ深い緑の山々を背景に、淡く梅の花の帯がつづいている。

先生の家のはとは駐車場になっていて、観梅客のバスが数台止まっていた。

島田氏は月ヶ瀬ゴルフ場まで見せてくれたが、この村も過疎化と高齢化に悩み、梅のほかにも現金収入を考えているのだ。

東京経済大学の協力で、収録は図書館で行なうことになった。

2月27日、NHK エンタープライズの平原ディレクターとともに下見に訪れる。藤本学長室長の案内で書庫の中まで見せてもらう。収録に使う閲覧室は、天井がやや低く、上の階で椅子を動かす音がノイズにならないか心配するが、当日は静かにするよう注意し、この部屋には学生を入れないということで協力を依頼した。

その後、増田家を訪問し、最後の詰めをする。先生はこの収録のための原稿を執筆中であることを話された。何事もゆるがせにしない氏の姿勢には本当に頭が下る思いである。

3月2日は好天に恵まれた。午前10時スタッフは東京経済大学の図書館前に集合した。すぐに機材を降ろし、セッティングにかかる。キャンパスは、入学試験も終り意外に静かであった。閲覧室の壁際においてある書棚と地球儀を背景に、低いテーブルと椅子を配置する。

午後1時に増田先生が図書館に来られた。

1時間。「市民」という考え方の基底にあるもの、「古代ゲルマン社会」の研究のプロセスを話す。テープチェンジだ。

2時間経過。古典古代から中世ヨーロッパへと、話は熱を帯び佳境に入る。シュペングラー、ドブシュ、ピレンヌらの学説を述べつつ、自分が疑問に思ったことなどを、縄をなうように話す。しかし、氏の口調に少しずつ疲れを感じ取れる。既に60分テープで3本目が回った。

VTR 4本目。「国民国家」「国民経済」「主権概念」の成立と話が進み、これからの問題の話に入る。文明と文化・文化形成力と重要ポイントに話が及び、学生に知ってもらいたいことという話になったところから、さすがに語調がやや乱れてきた。もう3時間半もお話が続いているのだ。限界だと思った。「学生に…」のところから日を改めて収録することとした。

閲覧室の窓から差し込む光が赤みを帯び、時計は4時を回っていた。

この年は桜の開花が早く、3月下旬には花の便りがしきりであった。

前回の撮り残し分の収録を4月4日に設定した。今度は一人語りではなく、数人の学生を目の前に話すスタイルをとってみた。当日は絶好の日和となり、東京経済大学のキャンパスでは、さまざまなクラブや同好会の学生が、新人を募集するために大勢出ていて、活気があふれている。

経済学部長の劉進慶教授のゼミから学生が5人集まってくれた。藤本室長を通じて頼んでおいたものである。

図書館前の広場にカメラを据えて、最後の収録が始まった。

増田氏は、自分の少年時代のこと、大学に入ったいきさつ、そこで出会った先生のこと、卒業してなにをしようかと悩んだことなど、60数年むかしを懐かしむように、惇々と話して行く。学生たちは身じろぎもしないで聞き入っているようすである。

そして最後に学問とはどういうものかということや、学生に望むことをじっくりと語った。

構内の満開の桜並木から、こぼれるように花びらが落ちる中を歩く先生の姿を撮影して、すべてのロケを終えた。

#### IV. 完成および試写

素材は1時間テープで6本になった。語りが4本、実景ロケ分1本、それにインサート用素材が1本という計算である。お話のトータル時間は、正味ほぼ3時間というところか。

お話の中に重複している部分等もあり、一応60分程度にする方針で進めることにして、編集にはいった。平原ディレクターは増田氏の話すべてを再生して、時間と内容のメモを作った。大学ノート1冊にぎっしりと書き込まれたメモを見ながら、カットするところを決めていった。3/4インチのテープで編集するので、1/2インチよりも時間がかかる。このオフライン編集に3日を要した。

編集が作品の最終的な出来を左右する。カット表にもとづいて1カット1カットを手打ちでデータを入れ、つないでいく。なにしろ60年の研究を60分にしようというのだから、なまやさしいことではない。

話の筋は通っているか、何か落としたところはないか、顔と顔のつながぎをどう処理するかなど、一つ一つチェックしながらの作業である。この番組の編集を買って出してくれた寺田エンジニアのテクニックで、仕上がりは予想以上のものになった。

5月9日午後3時、研究資料棟大会議室で試写会が始まった。加藤所長以下30名ほどの出席者である。先ず高杉部長が「学術の記録」開発のねらいを説明し、古川ディレクターが増田四郎先生の紹介をしたあと、制作を担当した小畠が交渉の経過や実際のロケーションについて話した。

いよいよ試写に移る。

満開の桜の下をゆっくりと歩む増田氏。それにロール・テロップがかぶってくる。続いて大学のキャンパスで学生を相手に増田氏の話が始まる。場面はオーバーラップで図書館で語る増田氏に変わる。

途中を一部カットして、増田氏の語りは終わり近くの話「学ぶほどに疑問が湧いてくる」というあたりを見せて試写を終った。

出席者から次々と感想や意見が出された。主なものは次のとおりである。いずれも核心をつくものであり、今後の研究開発と制作にとって指針となるだろう。

- 学問遍歴の部分はかなり専門的で内容的にむづかしい。書物で言えば「注」にあたるものをつける工夫はないか。
- この企画は、その人ならではの学問研究を、時間枠にとらわれず記録することであり、その意味で専門性はもっと高くしてもよい。
- 話を聞いていると映像が邪魔になることがある。
- 人物を描くのか、研究を語ってもらうのか。両者がうまくクロスすればよいが、中途半端になるおそれもある。人選も大きなカギとなろう。
- 淡々と語る人の場合は、演出が生きない。

- 人間性を表現する場合は、映像を生かした感性に訴える手法も必要ではないか。
- 人物との長い付き合い、その人物にどこ迄入り込めるかが勝負といえる。

その後複製テープを増田氏のもとに届けた。氏はそれを見た後、概要次のような懇切な手紙をくださった。

「今度の仕事は、自分の半生を振り返って、これまでやってきたことを整理する上でいいきっかけになった。私自身にとってもよいタイミングだった。あまりテレビで話した経験がないので、あれでいいのかどうか分からないが、ビデオを見るとなかなかうまくまとめられている。(同時に届けた「研究会資料」にもふれて) 著書からの抜粋はいいところを抜き出してくれている。よい読者がまた一人増えた気がする。」

「増田四郎」篇は、試作篇として、制作期間をはじめさまざまな制約の中で制作せざるをえない状況にあった。とはいえ担当ディレクターとして反省することは多い。次にそれを記して終りたい。

1. 一人の研究者の足跡をたどることは、極めて困難なしごとであり、十分な準備期間が必要である。多くの関係者にも当たって、その人物の一番よいところを発見しなければならない。
2. それでもなおその人の研究の全貌を把握・理解することは不可能事である。テレビ番組としてその限界点をどこに設定するか。
3. 「人間を描くのか」(見せるのか)「学術を紹介するのか」(聞かせるのか)、これは二者択一の問題ではない。その接点をどう発見し、どう表現するか、演出の基本はそのあたりから発想の方がよい。ストレート・トークか、一人あるいは複数の聞き手を置くのかということも、これにふくまれる。
4. 1年に2人ぐらいのペースでは、十分な『人物ライブラリー』にはなりえないかも知れないが、人選が大切な作業となる。人物情報の収集、そのための研究開発の方法確立も課題であろう。

人物ライブラリー「学術の記録」：増田四郎篇 構成案

No.	シーケンス	映 像	内 容
1	オープニング	○東京経済大キャンパスを歩く増田氏 桜が満開になっている 迎え打ち、横打ち、見た目など	○BGM (TM 風に) ○ロールテロップ 人物紹介 印象的に
2	生いたち	○学生たちを前に語る増田氏 ○映像インサート 奈良県・月ヶ瀬村 梅林、村のた たずまい、増田氏の生家跡、三重 県・上野中学校（現上野高校）と かつての通学路、14キロの山道 ○聞く学生たち	○増田氏語る 1908年にこの村の農家に生まれ た。 その後の生いたち 学校のこと 進学のこと、とくに印象に残るこ と 繭の値段がどう決まるのか 村の人々のくらし 別の機構と経済情勢で決まる
3	学問への出発	○続く ○関東大震災後の東京 古本屋街など インサート ○先生がたのスチール写真 故上田、三浦、福田氏ら	○上京、東京商科大学（教員養成所） 入学 その頃の東京のようす 恩師とのであい 学問への憧れ 神田の古本屋街や 図書館通い ○学問とは ○思想遍歴の3年間、歴史研究へ 出会った先生のことなど
4	学問遍歴(1)	○東経大図書館で語る増田氏	「市民」という考え方の基底にあるもの は何か ——「中世都市の特殊性」 「古代ゲルマン社会」の研究
5	学問遍歴(2)	○増田氏語る（東経大で） ○ヨーロッパの古い町 スチール写真など	「古典古代」から「ヨーロッパ中世」へ の転換の問題 「西ヨーロッパ的」経済基盤の成立 農業にみられる特殊西ヨーロッパ 的なもの ——「三圃農法」の起源と普及
6	学問遍歴(3)		西ヨーロッパ世界の構造的特質（14、 5世紀までの） キリスト教的統一文明と諸地域の 文化 封建制・身分制 単一価格体系の形成（ハイザとイ タリア） 大航海時代へ 「国民国家」・「国民経済」・「主権概念」 の成立 EC 形成の背後にあるもの



7	社会科学の課題	○増田氏語る	○新しい社会科学の理論構築と視角設定の課題 ○「西ヨーロッパ的社会科学思考の呪縛」からの解放を願うことは？ 氏にとって、また日本人にとって どんな意味か
8	青年たちに与える	○増田氏と学生たち 東京経済大学で (学生たちに)	○青年に何を期待するか ○「学ぶ」ことについて
9	エンディング	○キャンパス・学生たちの群	○ M.